

# 鉱山遺跡の観光資源としての活用に関する現状と課題

## Current Status and Issues of Utilization of Mine Sites as Tourism Resources

森田 なつみ

MORITA Natsumi

### 1. 序論

#### (1)研究の背景

1994年の第18回世界遺産委員会にて採択された「世界遺産一覧表における不均衡の是正及び代表性・信頼性の確保のためのグローバルストラテジー」において、産業・鉱山・鉄道関係の遺産の強化が謳われた<sup>1)</sup>ことや、日本国内においても、2007年より近代化産業遺産の認定が始まった<sup>2)</sup>ことなどから、産業遺産への注目度は国内外で高まりを見せていることがうかがえる。近年では、文化財全体として、その保護を考える際に活用が組み込まれる風潮が高まっており、2018年の文化財保護法改正によって、制度としても文化財の活用が重視されるようになった。この流れは産業遺産に関しても例外ではなく、むしろ「活用なくして保存なし」と提言される程<sup>3)</sup>、活用の必要性が意識されている。

日本には数多くの鉱山遺跡が存在し、いくつかの鉱山遺跡では坑道などを利用した観光資源としての活用が積極的に進められているが、それらは全体のほんの一部にすぎない。しかし、2007年に石見銀山遺跡が世界遺産に登録されたこと、また現在、佐渡金銀山遺跡が世界遺産登録を目指している動きを受けて、今後鉱山遺跡への社会的関心が高まり、活用への機運もより高まりを見せることが期待される。ただし、鉱山遺跡は一見しただけではその価値を理解することが難しい場合が多く、それらを観光や地域活性化に活かしていくためには、活用方法の検討が不可欠である。経済産業省を中心に、近代化産業遺産を活用して地域活性化を図るための具体的な方策の提案として、活用事例集や活用のためのガイドブックが作成される<sup>2)</sup>など、産業遺産全体の活用に関しては積極的な議論が行われてきたが、鉱山遺跡の活用の特化した研究は少ないのが現状である。

#### (2)研究の目的と位置付け

本研究では、国内における鉱山遺跡の特徴を把握すること、そして観光資源としての活用の現状を把

握し課題を考察した上で、今後、鉱山遺跡を観光資源として活用していく際に、その魅力を伝えるためにより有効な手法を検討することを目的とする。

対象としては、国史跡に指定されている鉱山遺跡である、黄金山産金遺跡、石見銀山遺跡、延沢銀山遺跡、佐渡金銀山遺跡、甲斐金山遺跡、長登銅山跡、足尾銅山跡、多田銀銅山遺跡の計8件を取扱うこととする(図1)。国史跡を対象とする理由としては、資源の歴史的文化的評価が明確であること、及び保護を前提とした活用が求められることが挙げられる。



図1. 国史跡に指定されている鉱山遺跡の所在  
(帝国書院日本白地図より筆者作成)

既往研究においては、個別の鉱山遺跡を対象とした活用の事例紹介が多く、鉱山遺跡全体を対象とした観光資源としての活用を俯瞰的に捉える研究は数える程しか行われておらず<sup>4)6)</sup>、更なる研究の蓄積が必要である。鉱山遺跡では活用の方向性として観光資源化が中心的な位置を占めているが、観光資源としての見せ方には多くの課題が存在し、観光客にその魅力を伝えきれていないのが現状である。したがって、観光資源としての活用実態を把握し、その在り方を検討することは、現在観光資源として利用されている鉱山遺跡、あるいは、今後観光資源としての活用に着手する鉱山遺跡が、それらの魅力を十分に示すことで持続可能な観光資源として成立する方法を模索する際の一助となることから、大いに意義があると言える。

表 1. 各鉱山遺跡の特徴<sup>注1)</sup>

遺跡名	最盛期	指定範囲	分布状況	指定範囲内に含まれる	坑道の有無	価値					
						代表的な鉱山	鉱山技術史上の重要性	鉱山経営の実態や変遷を示す良例	良好な保存状態	周辺地域への影響力	歴史資料の豊富さ
黄金山産金遺跡	古代	小規模	集合型	生産、信仰	×						
石見銀山遺跡	江戸初期	大規模	散在型	生産、支配、生活、信仰、流通	○	○	○	○	○	○	
延沢銀山遺跡	江戸初期	中規模	散在型	生産、支配、信仰	○	○	○				
佐渡金銀山遺跡	江戸初期、近代	大規模	散在型	生産、支配、生活、信仰、流通	○	○	○	○	○		○
甲斐金山遺跡	戦国～江戸前期	中規模	散在型	生産、生活、信仰	○			○	○		○
長登銅山跡	古代	中規模	集合型	生産、信仰	○			○	○		○
足尾銅山跡	江戸前期、近代	小規模	散在型	生産、信仰	○	○	○	○	○		
多田銀銅山遺跡	江戸前期	中規模	散在型	生産、支配、信仰、流通	○	○	○	○	○	○	○

## 2. 各史跡の特徴(表1)

第2章では、各史跡の特徴を把握することを目的として、各史跡の基本情報、構成要素、価値を整理した。表1は、各史跡の「最盛期」、「指定範囲の規模」、「分布状況」、「構成要素」、「価値」に着目し、各史跡の特徴をまとめたものである。同じ国史跡に指定されている鉱山遺跡と言っても、時代や規模、分布状況などそれぞれに異なる特徴を有していることが分かる。

時代としては、江戸時代初期から前期に最盛期を迎えている遺跡が多い。黄金山産金遺跡と長登銅山跡は古代に最盛期を迎えており、佐渡金銀山遺跡と足尾銅山跡は近代にも最盛期を迎えている。規模に関しては、史跡によって大きく異なっていた。ここでは、大規模・中規模・小規模の3つに区分しているが、その中でも史跡によってかなりの差が見られる。分布状況については、古代に最盛期を迎えた黄金山産金遺跡及び長登銅山跡のみ集合型であり、残りは全て散在型である。価値については、古代に属する鉱山遺跡に関しては言及が乏しいものの、他の鉱山遺跡では、「代表的な鉱山であること」、「鉱山技術史上の重要性」、「鉱山経営の実態や変遷を示す良例であること」、「良好な保存状態」の4点がある程度共通して認められている。一方で、特定の鉱山遺跡でしか認められない価値の存在も確認することができた。

共通する点としては、生産と信仰に関する要素が必ず含まれていることである。鉱山遺跡というと、第一に生産活動の場としての側面が思い起こされるが、史跡指定範囲内に含まれる構成要素を確認したところ、生産に関する要素のみで成立している遺跡はなく、どの遺跡も少なくとも2種類以上の要素を含んでいることが分かった。すなわち、生産活動を中心として多様な要素が広がっていることが鉱山遺跡全体に共通する大きな特徴であると言えよう。

## 3. 保存活用の基本方針と関係者の意識

第3章では、各史跡の保存管理計画等をもとに、保存管理及び整備活用の基本方針を整理した。また、各史跡の管理団体の担当者等、計23団体28名の関係者に対して行ったヒアリング調査<sup>注2)</sup>により把握した、関係者の活用への意識についても整理した。

### (1)保存活用の基本方針

全体としては、史跡を構成する各要素の性格に合った個別の保存管理方法の提示、史跡全体の一体的な活用や周辺環境・景観との調和に配慮した総合的な活用への言及が見られる場合が多く、第2章で確認した、広範囲に多様な要素が分布するという鉱山遺跡の特性が、保存活用の計画においては考慮されていることが確認できた。また、史跡である以上、文化財としての保存を最優先とすることを指摘しながらも、学術的調査による史跡の価値の裏付けを行った上で、史跡の価値を顕在化し理解を促すことの重要性についても広く指摘されており、保存だけでなく活用への意欲も高いことが伺えた。

### (2)関係者の活用への意識

多くの地域において観光による地域活性化が期待されており、鉱山遺跡の観光資源としての利用にも前向きな姿勢を取っている場合が多いことが明らかとなった。ただし、観光資源としての活用には課題が山積していることも共通の認識として広く認められた。また、鉱山遺跡は地域における中心的な観光資源であるという認識よりは、その他周辺の観光資源を巡るルートの一部であるという認識や、他の観光資源と組み合わせて活用していくことが望ましいという認識が強いようであった。観光客に対して伝えたいことに関しては、各史跡によって様々であったが、佐渡金銀山遺跡と甲斐金山遺跡を除く6件の史跡においては、文化財としての歴史的価値が指摘された。ただし、観光客に対して深い理解を求めるのは難しいと認識している関係者が大半であった。

#### 4. 活用の実態

第4章では、各史跡における観光資源としての活用実態を把握するために、主要素の公開状況を整理した。また、国土交通省により示された観光地としての土台づくりに必要な取り組み<sup>7)</sup>を参考に、観光利用の実態を把握する際に着目する項目として、坑道の活用状況、ガイド施設、ガイドツアー、イベント、モデルコースを設け、それらの詳細を確認した。

##### (1) 公開の現状(表2)

公開状況については、坑道内部を除いて立入が制限されている場所はほとんどなく、坑道に関しても各史跡につき少なくとも1カ所は見学が可能となっていることが明らかとなった。ただし、立入が制限されていないとしても、情報提供が十分ではない等、積極的な活用がなされているとは言えない現状も垣間見ることができた。

表2. 各史跡における主要素の公開状況<sup>注1)</sup>

遺跡名 (略)	生産関連					
	砂金採取地跡	露天掘り跡	坑道	製錬場跡	近代遺産	その他
黄金山	◎	-	-	-	-	-
石見	-	△	◎/×	△	△	-
延沢	-	-	◎/×	-	-	-
佐渡	△	◎/△	◎/×	◎	◎/△	△
甲斐	-	○	○	○	-	-
長登	-	△	○/×	◎	◎/△	-
足尾	-	-	◎/×	-	○	○/×
多田	-	×	◎/×	×	×	-

  

遺跡名 (略)	支配関連		生活関連		信仰関連		流通関連	
	役所跡	城跡	集落	集落跡	宗教施設	墓・石碑	道	港
黄金山	-	-	-	-	◎	-	-	-
石見	◎/△	◎/△	◎	△	◎/△	◎/△	◎	◎
延沢	-	◎	-	-	◎	-	-	-
佐渡	◎/△	-	○	◎/△	△	△	△	◎/△
甲斐	-	-	-	○	-	○	-	-
長登	-	-	-	-	◎	◎	-	-
足尾	-	-	-	-	△	-	-	-
多田	×	-	-	-	◎	-	×	-

◎：ガイド施設や案内板を設置し常時積極的に公開

○：ガイドツアーなどを通して、定期的に公開

△：積極的には公開していない、自由見学は可能程度

×：非公開

##### (2) 活用の現状

###### 坑道の公開方法(表3)

坑道を持たない黄金山産金遺跡を除く7件の史跡について、公開されている坑道の公開方法と坑道内部における展示手法を表3にまとめた。公開方法としては、ガイド施設として公開されているもの、個人での自由な見学が可能なもの、ツアー見学での

公開となっているものの3種類が見られた。展示手法としては、パネル展示や人形・実物展示が見られた。ガイド施設と自由見学の坑道は、基本的に常時公開なのに対し、ツアー見学では開催数や参加条件などに制約がある。また、延沢銀山遺跡と多田銀銅山遺跡では、簡単な解説パネルが1枚設置されているのみで、十分な情報提供がなされているとは言えないのが現状である。このように、全ての坑道が積極的に公開され、十分な情報を提供しているとは言えないことが明らかとなった。

表3. 各史跡における坑道の活用方法<sup>注3)</sup>

史跡名 (略)	公開坑道	公開方法	公開頻度	坑道内の展示手法
石見	龍源寺間歩	ガイド施設	常時公開(元旦休業)	パネル展示
	大久保間歩	ツアー見学限定	3~11月の金土日祝 お盆期間、予約制	
	釜屋間歩			
延沢	銀鋳洞跡	自由見学	常時公開(冬期休業)	パネル展示
	疎水坑道			
佐渡	宗太夫坑	ガイド施設	常時公開	パネル展示・人形展示
	道遊坑	ガイド施設	常時公開	パネル展示・実物展示
甲斐	黒川金山遺跡	自由見学	常時公開	
	中山金山遺跡	ツアー見学	年に数回、予約制	
長登	大切4号坑	ツアー見学限定	予約制(団体のみ)	
	大切9号坑			
	大切10号坑			
足尾	通洞坑	ガイド施設	常時公開	パネル展示・人形展示
多田	青木間歩	自由見学	常時公開	パネル展示

#### ガイド施設

延沢銀山遺跡以外の7遺跡は、ガイド施設を有しており、石見銀山遺跡、佐渡金銀山遺跡、足尾銅山跡には複数のガイド施設が存在する。各施設の入館者数に着目すると、全体としては横這いか減少傾向にある。石見銀山世界遺産センター、佐渡史跡佐渡金山、足尾銅山観光の3施設は長期的に高い集客力を維持してきたが、いずれも入館者数は減少の一途を辿っている。

#### ガイドツアー

石見銀山遺跡、佐渡金銀山遺跡、足尾銅山跡では複数のガイドツアーが十分な頻度で提供されている。多田銀銅山遺跡のガイドツアーは、猪名川町全体を案内するものであるが、内容的には多田銀山遺跡に特化したものであり、多田銀銅山遺跡でもガイドツアーに関しては十分な提供が行われていると判断できる。甲斐金山遺跡と長登銅山跡では、鋳山遺跡に特化したガイドツアーは存在するものの、十分な提供がなされているとは言えないのが現状である。黄金山産金遺跡と延沢銀山遺跡では、鋳山遺跡に特化

したガイドツアーは提供されておらず、町や市全体のガイドツアーについても頻度が少なく、ガイドツアーの提供は極めて不十分である。

#### イベント(表4)

イベントの開催数としては、石見銀山遺跡が圧倒的に多く、次に佐渡金銀山遺跡、甲斐金山遺跡と続く。ここでは2017年度に開催されたイベントをまとめたため、2017年に世界遺産登録10周年を迎えた石見銀山遺跡や、国史跡指定20周年を迎えた甲斐金山遺跡では例年より若干開催数が増えているが、それを考慮してもなお積極的にイベントを開催していると言える。長登銅山跡、足尾銅山跡、多田銀銅山遺跡においては、上述の3カ所に比べると開催数は多くないものの、定期開催の有無を考慮すると、毎年ほぼ同様のイベントが開催されており、安定したイベントの提供が行われていることが分かる。黄金山産金遺跡と延沢銀山遺跡については、イベントが積極的に開催されているとは言えない。イベントの内容に着目すると、いずれの史跡においても、その遺跡に関連するイベントが少なくとも1つは開催されている。ただ、石見銀山遺跡や佐渡金銀山遺跡のように、イベントの開催数が増えればなる程、その内容も多様化しており、史跡自体に直接は関係のないイベントも多く見られる傾向にある。

表4. 各史跡における2017年度開催イベント<sup>注4)</sup>

史跡名(略)	開催数	開催定期		形態				内容(遺跡への関連)	
		定期	非定期	参加体験型	講座公演型	観賞型	その他	あり	なし
黄金山	2	1	1	1	0	0	1	1	1
石見	43	13	30	22	6	5	12	14	29
延沢	1	1	0	1	0	0	0	1	0
佐渡	17	5	12	6	4	6	1	7	10
甲斐	10	6	4	5	2	0	3	6	4
長登	4	4	0	2	1	0	1	3	1
足尾	4	4	0	1	1	0	2	2	2
多田	2	2	0	2	0	0	0	2	0
総計	83	36	47	40	14	11	20	36	47

#### モデルコース(表5)

モデルコースの検討においては、史跡指定地が広範囲であればある程、また含まれる要素が多様であればある程、それら全てを取り入れた一体的なルートの設定が困難であることが示されるとともに、現状として、広範囲に多様な要素を有する鉱山遺跡においては、そのような遺跡全体を包括した見学ルートの提供が行えていないことが明らかとなった。

表5. 史跡の分布状況とコース内容の関係<sup>注4)</sup>

遺跡名(略)	規模	分布状況	コース内容
黄金山	小規模	集合型	◎
石見	大規模	散在型	△
延沢	中規模	散在型	△
佐渡	大規模	散在型	△
甲斐	中規模	散在型	×
長登	中規模	集合型	○
足尾	小規模	散在型	△
多田	中規模	散在型	○

◎：全ての要素が組み込まれている

○：ほぼ全ての要素が組み込まれている

△：特定の要素に偏っている、大部分が組み込まれていない

以上、各史跡における活用の実態を整理した結果、いずれの史跡においても活用に全く着手していないということはなかったが、その取り組みの度合いは史跡によって様々であり、また、活用において少なからず課題を抱えていることが明らかとなった。

#### 5. ガイダンス施設の展示分析(表6)

第5章では、各史跡におけるガイダンス施設の展示内容や展示手法を分析し、各施設における展示の傾向を把握した。

##### (1) 展示内容

展示内容に関する全体の傾向としては、生産活動に関する事柄に偏っていることが明らかとなった。第2章で確認したように、生産活動を中心に繰り返された様々な活動の痕跡を有する、その多面性が鉱山遺跡の特徴であり、魅力であるにもかかわらず、生産という鉱山遺跡の一面が強調されている場合が多いのは、課題として捉えるべきであることを指摘した。

##### (2) 展示手法

文字解説、実物資料に関しては、多くのガイダンス施設において取り入れられているが、映像と体験に関しては取り入れていない施設も多いことが分かった。また、模型に関しては、取り入れている施設は多いものの、文字解説や実物資料に比べるとその割合は圧倒的に少なかった。鉱山遺跡は多様な要素を有しているが故に、その全体像が見え難く、全体像を以下に分かりやすく伝えるかにより一層の工夫が求められる。視覚的に情報を提供することができる模型や映像を用いた解説は、鉱山遺跡の総体に対する把握を促す上で有効な手段であると考えられるが、現状としては十分に取り入れられておらず、この点についても課題として指摘した。

表4. ガイダンス施設の分析結果<sup>注3)</sup>

史跡名 (略)	ガイダンス施設		多く見られた展示内容(展示数)			展示手法の有無(展示数)				
			1位	2位	3位	文字解説	実物資料	模型	映像	体験
黄金山	わくや万葉の里 天平ろまん館		地質(11)	調査・研究、大仏(10)		○(25)	○(33)	○(1)	○(2)	○(1)
石見	石見銀山世界遺産センター		生産(26)	概要(18)	調査・研究(17)	○(59)	○(28)	○(11)	○(8)	○(7)
	石見銀山資料館		支配・経営(23)	生活(19)	生産(18)	○(29)	○(49)	○(2)	×	×
	重要文化財 熊谷家住宅		生活(38)	概要(6)	生産(4)	○(32)	○(27)	×	×	○(1)
	鞆館		生活(5)	概要(2)	流通(1)	○(10)	×	×	×	×
佐渡	史跡佐渡金山	金山資料館	生産(39)	地質(7)	生活(6)	○(27)	○(26)	○(19)	○(1)	○(1)
		宗太夫坑コース	生産(14)	支配・経営、地質(4)		○(25)	×	○(12)	×	×
		道遊坑コース	生産(7)	概要(4)	地質(3)	○(13)	○(2)	○(1)	×	×
	佐渡奉行所跡	御役所跡	支配・経営(6)	生活、調査・研究(5)		○(21)	○(4)	×	○(1)	×
		勝場跡	生産(15)	生活(7)	概要(6)	○(17)	○(12)	○(6)	×	×
	相川郷土博物館		生産、生活(22)		信仰(8)	○(30)	○(48)	○(1)	×	○(1)
佐渡西三川ゴールドパーク		生産(12)	地質(6)	概要(1)	○(11)	○(10)	○(1)	×	×	
甲斐	甲斐黄金村・湯之奥金山博物館		生産(10)	調査・研究(7)	地質(6)	○(15)	○(11)	○(6)	○(5)	○(2)
長登	長登銅山文化交流館		生産(29)	調査・研究(23)	生活(16)	○(17)	○(31)	○(2)	○(1)	○(3)
足尾	足尾銅山観光	坑内・屋外	生産(26)	地質(7)	概要(5)	○(8)	○(8)	○(22)	×	○(2)
		銅資料館	生産(12)	地質(1)	-	○(4)	○(5)	○(2)	○(1)	○(1)
		鑄銭座	生産(7)	生活、概要(2)		○(9)	○(5)	○(2)	×	○(1)
	足尾歴史館		生活(25)	生産(15)	公害(12)	○(12)	○(56)	○(9)	○(1)	×
足尾銅山文化交流館		概要(11)	生産(8)	地質(4)	○(15)	○(13)	×	○(1)	○(2)	
多田	多田銀銅山悠久の館		生産(11)	調査・研究(9)	概要(8)	○(24)	○(17)	○(4)	○(1)	○(2)

## 6. 結論

### (1)活用の現状と課題

第2章で確認したように一口に鉱山遺跡と言っても、その規模や残存する構成要素などは異なり、史跡によって様々な特徴が存在する。ただし、生産活動の痕跡のみで成立しているものではなく、生産活動を中心に広がる多面性が鉱山遺跡全体に共通する特徴であり、鉱山遺跡の面白さである。各史跡の保存活用計画においては、その鉱山遺跡の多面性が認識されていることが多いが、ガイダンス施設の展示内容が生産関連の事柄に偏っていることから分かるように、実際の活用においてはそれが活かされているとは言えないのが現状である。また、保存活用計画や関係者の意識としては、鉱山遺跡を観光資源として活用することに前向きな姿勢を示しているが、現状としては活用が進んでいない場所も多く、また積極的な活用に取り組んでいる史跡においても少なからず課題を抱えていると言える。さらに、本論文における分析や、実際に8カ所の鉱山遺跡の現地調査を通して明らかになったことは、いずれの遺跡においても現状では、鉱山遺跡の総体を伝える仕組みが乏しく、全体像が見え難いということである。そして、その全体像の見え難さが、鉱山遺跡が分かり難いと言われる要因のひとつなのである。

### (2)課題に対する提案

これらの現状と課題に対して、どのような手法を用いれば、鉱山遺跡の総体を示せるかという問題について、以下の4点を指摘する。本研究で対象としたのは、国史跡に指定されている鉱山遺跡であり、規模や残存する要素などが比較的整っている、資源的価値の高い事例と言える。国史跡に指定されていない鉱山遺跡では、鉱山遺跡の総体を示す痕跡がより乏しいことが予想されるが、基本的にはいずれの鉱山遺跡においても同様の提案ができると考える。

#### 提案①：ガイダンス施設の展示

展示内容に関しては、生産関連以外の要素も増やすべきである。生産に関する事柄は専門的な要素が強く理解が難しいが、生活や文化・芸能、信仰などは現代の暮らしに通じる部分もあるため比較的受け入れやすく、そういった意味でも生産以外の要素を取り入れ、導入とすべきである。また、展示手法に関しては、視覚的に情報を与えることのできる模型、映像、あるいはVRをより導入していくべきである。鉱山遺跡では、間歩や町並み以外では、現地において当時を瞬間的に想起できる場所は多くない。そのため、ガイダンス施設等である程度当時の様子や、遺跡の全体像を把握した上で、現地見学に臨むことが理解を促す上で重要であると考えられる。

## 提案②：ガイドの提供

鉱山遺跡というのは、一部の坑道などを除いて、来訪者を一目で魅了できる類の観光地ではない。鉱山遺跡特有の多面性を知り、歴史的背景を知り、それが現地に残された痕跡と繋がることで初めてその遺跡の価値が見えてくるものである。したがって、前提知識のない来訪者が自力で理解するのは困難である場合が多く、現地見学における理解を促す有効な情報提供手段のひとつとして、ガイドによる解説の機会を充実させていくことが必要である。

## 提案③：モデルコースの設定

鉱山遺跡というと、やはり生産活動の場であったという印象が強く、来訪者は特定の要素を見学するだけで、その多面性には気付かずに終わっている場合が多いのが現状であると思われる。したがって、特に広範囲に多様な要素が分布する鉱山遺跡では、それらの多様な要素を全て組み入れた上で、何をどの順番で見るべきかを示すことが、来訪者にとって非常に大きな手助けとなる。もちろん、広範囲であればある程、見学に要する時間は多くなるため、一度に全ての要素を見学するのは難しい。また、基礎知識がない人にとっては一度に全てを理解するのは難しいであろう。そこで、来訪者に合ったレベルで選択ができる複数のコースを設定し、段階的に理解を深められるような仕組みを整えるべきである。ただし、それらのコースには鉱山遺跡を構成する全ての要素が組み込まれるとともに、それらが鉱山遺跡を作り上げているという事実を示すことが重要である。

## 提案④：観光地としてのコンセプト

鉱山遺跡の特性を考慮すると、観光資源として活用する場合、娯楽のためだけの観光地ではなく、学習を伴う観光地として進めるのが最適である。実際に保存活用計画や関係者の意識では、学習型観光を意識していることが多かった。遺跡における情報提供の工夫はもちろん重要であるが、少なからず観光客側にも学習意欲がなければ理解が進みにくいのは事実である。遺跡における適切な情報提供と観光客の姿勢が揃った時、はじめて鉱山遺跡の価値が理解される活用の仕組みが完成するものと考えられる。

また、関係者の意識としては、現状では、鉱山遺跡は周辺の観光資源を巡るルートの一部であるという認識や、他の観光資源と組み合わせることが望ましいという認識が強かったが、鉱山遺跡の総体が示される魅力的な活用が実現すれば、鉱山遺跡単独でも十分に観光資源として成立すると考えられる。

以上が、鉱山遺跡全体の現状と課題に対する提案であるが、繰り返し指摘しているように、鉱山遺跡と一口に言っても、それぞれに異なる特徴を有しており、有効な活用方法も遺跡ごとに異なる。例えば、石見銀山遺跡や佐渡金銀山遺跡のように規模が大きい遺跡程、含まれる構成要素が多様な傾向にあり、黄金山産金遺跡のように規模が小さい遺跡程、要素が乏しい傾向にある。規模が小さければ、遺跡全体を見せること自体は容易だが、残存する要素が少ない分、現地には残されていない要素も含めて往時を想起させる工夫が必要である。一方、要素が多様に残存している遺跡では、実際にそれらを活用することができるため、往時の様子を想起させることは比較的容易だが、規模が大きい分、遺跡の全体像を捉え易くする工夫が必要である。いずれの場合も、来訪者に対する必要最低限の情報源としてガイダンス施設を核とし、規模の大きな遺跡ではルート設定に力を入れるべきであり、残存する要素の乏しい遺跡では現地での情報不足を補うためにガイドツアーなどを充実させるべきであろう。このように、各鉱山遺跡の特徴に合わせて、有効な手法の組み合わせを検討し実行することが、鉱山遺跡を分かりやすく、そして魅力的に伝える上で最も重要なのである。

### <注および参考文献>

- 1) 各史跡におけるヒアリング調査の回答及び、保存管理計画等に基づく。
- 2) ヒアリング調査の対象は、各史跡の管理団体において実質的な管理を担当している各市町の文化財課に相当する部署の担当者、及びガイダンス施設の担当者を中心とし、可能な場合は各市町の観光課に相当する部署の担当者にも調査を実施した。
- 3) 各史跡における現地調査等に基づく。
- 4) 各史跡のパンフレットや観光情報サイト等に基づく。
- 1) 文化庁 HP<<http://www.bunka.go.jp/index.html>>2018/02/06 アクセス。
- 2) 経済産業省 HP<[http://www.meti.go.jp/policy/local\\_economy/nipponsaikoh/nipponsaikohsangyouisan.html](http://www.meti.go.jp/policy/local_economy/nipponsaikoh/nipponsaikohsangyouisan.html)>2018/02/11 アクセス。
- 3) 日本産業遺産研究会・文化庁歴史的建造物調査研究会『建物の見方・しらべ方 近代化産業遺産』pp3-4, 1998。
- 4) 川崎茂「鉱山跡地の風景論」、『金沢大学文学部論集史学科篇』13/14号, pp.1-48, 1994。
- 5) 平井健文「日本における産業遺産の観光資源化プロセス-炭鉱・鉱山の遺構に見出される価値の変容に着目して」、『観光学評論』5(1), pp.3-19, 2017。
- 6) 波多野想・田原淳史「鉱山遺跡を対象とした保存・活用の特徴と傾向」、『遺跡学研究:日本遺跡学会誌』(15), pp.123-128, 2018。
- 7) 国土交通省総合政策局『魅力ある観光地域づくりの秘訣～地域の取組をつなぎ・効果を高めるヒント集～』2008。